



抱える業界トップランナーだが、2020年度の売り上げは、前年度比4割減となった。

仕事が減っても、社員の雇用を維持するため、倉庫の一部を飲料水などの物流倉庫にするなど、一部業種転換をしているが、生き残りを図っている。

「エンタメ業界の苦境」と言われ始めて1年半が経った。ステージを支え続ける音響や照明などの裏方の現状を取材した。

8月下旬の金曜日。舞台音響・照明の国内最大手・共立の、神奈川県厚木市にある倉庫を訪れると、広大なスペースに、音響・照明機材が所狭しと積み重ね、外には大型トラックがずらりと並んでいた。「週末前の金曜日は、普段だったからトラックも機材も出払っているんですよ」。共立の市川一弘執行役員はそう嘆く。

1966年のビートルズ来日をはじめ、名だたるミュージシャンの公演の多くに関わってきた。300人の社員を響や照明に加え、美術・大道

音響・照明…苦境続く裏方

生き残れるか 暗中模索



●共立の倉庫。音響・照明機材のメンテナンスもしている川神奈川厚木市。●機材などを運び込み、ステージの準備をするスタッフ。日本舞台音響事業協同組合提供

具や運営補助・警備などの団体も含めた事業者団体が集結した「ライブエンタテインメント技術運営スタッフ団体連合(スタッフ連合)」が発足。今月中には一般社団法人となる予定だ。

スタッフ連合の調査では、昨年の売り上げは前年比で音響関係が73%減、照明関係が60%減、美術・大道員関係が79%減、舞台監督・進行関係が75%減、運営補助関係が88%

%減と、軒並み壊滅的な打撃を受けた。売り上げの減少は借金でまかなう。「みんな億単位の借金を背負った。なんとか持ちこたえているが、将来への不安は大きい」と日本舞台音響事業協同組合の西澤勝之氏は語る。全国舞台テレビ照明事業協同組合の寺田義雄理事長は「雇用調整助成金と、政府や自治体の融資でなんとか今日までつないできた。これが

絶たれたら、業界は終わってしまう」と訴える。事業者は雇用調整助成金を使って一定の給与をなんとか社員に支払っているが、フリーランスはより厳しい状況に置かれている。「仕事がなくなっちゃってね。やめます」「別のアルバイトを始めました」。フリーランスなどによって組織される文化庁が今春始めた支援事業「ARTS for the future!」の対象は公演などの主催者で、個人ではない。「団体を支援することに、そこからフリーランスや個人の方に支援が届くことを意図している」としているが、大規模公演が少なくフリーランスにまでなかなか仕事が回らない現状を考えると、そうした支援の方法が、本当にフリーランスへの有効な支援につながるのか、疑問が残った。(定塚遼)